

平成25年度

「学生によるオレンジリボン運動」 東京学芸大学 実施報告書



実施主体 東京学芸大学 馬場幸子自主ゼミ

実施内容 平成25年11月1～3日の大学祭にて啓発活動

①事前に取り組んだ内容

『子ども虐待防止&対応マニュアル』を読んで児童虐待について学ぶ。「学生によるオレンジリボン運動」についてのチラシ、オレンジリボンの作成(2000枚、2000個)。小金井祭実行委員会にて、参加団体の代表者に配布、地域や子育て支援団体への配布・掲示、学生への配布。掲示物の作成と全国のNPOに協力の呼びかけを行う。

②実施期間に取り組んだ具体的内容

小金井祭期間中、休憩室にて学生が作成した掲示物の展示や各NPOのパンフレットの配布、アンケートの実施。また11月3日には地域の子育て支援団体、現職の教員、元保健師、他大学の学生を招き、「児童虐待をこれ以上起こさせないために、私たちにできることとは」というテーマでグループディスカッションを行う。附属の幼稚園や、家庭科教育研究学会でのパンフレットやオレンジリボンの配布を行う。

③「オレンジリボン運動」を終えての感想等

掲示スペースに訪れた来場者の反応や実際にオレンジリボンについて知った学生の反応、グループワークに参加してくれた地域の人々の反応を振り返ると当大学で活動を行った意義は大きいと考える。

しかし、今年度の活動においては、小金井祭実行委員や大学学生課と「オレンジリボン」の配布に関して連携不足がみられた。小金井祭中の環境美化の観点や特定の思想の啓発という観点において、教室外で配布・宣伝することが許可されなかったが、この点に対して「どうすればこれらの問題を乗り越えられるのか」私たちのほうから学生課のほうに早期に相談していく必要があった。そしてそのためには「学生によるオレンジリボン運動」の意義を明確にし、その活動を教育系大学である本学において行う有効性について深めていかなければならない。どうすれば周囲に理解・協力を得ることができるのかについてもゼミ生で考えていきたい。

今回の活動を通して心に残ることがあった。それは掲示を見た人からの自身の経験を踏まえた上での「向き合うのが怖い」「つらい」という感想である。また、一緒に連れてきた子どもに虐待のことを教えない、自分自身も虐待と向き合いたくない、という母親もいた。

掲示やパンフレットにより広報活動するだけでなく、掲示を通してケアをする、守るという観点が私たちに必要であることに気付いた。掲示を作成していく上で「身近なところに虐待がある」と学び、それを一般の人たちに伝えたかった私たちでさえも、私たちのすぐ近くにいるかもしれない、心を痛めている親子へ向けての配慮が足りなかったかもしれない。掲示や活動を通して「伝える」だけでなくその先まで考えた活動をする必要がある。このように一歩立ち止まって振り返ってみることがこの活動を進めていく上で重要な態度であることに気付いた。

